

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第38輯

都市計画道路羽倉崎・嘉祥寺線建設に伴う

# 羽倉崎遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 9

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第38輯

都市計画道路羽倉崎・嘉祥寺線建設に伴う

# 羽倉崎遺跡

— 発掘調査報告書 —

1989

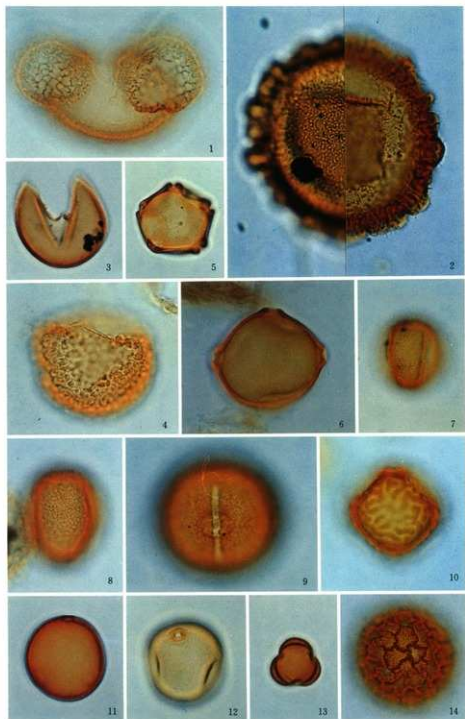
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



Ⅱ区北壁断面（南から）



Ⅱ区北壁断面部分拡大（南から）



花粉化石 (倍率 700倍)

## 序 文

羽倉崎遺跡は、大阪湾岸に立地することと相俟って古墳時代の製塩土器の散布地として、古くから周知されており、泉佐野市域においては、調査件数の増加に伴いその実態は判明しつつありますが、田尻町域については、今回初めて調査が行われたものです。

今回の調査結果については、本報告書に詳しく記述しているところではありますが、13～15世紀を中心とする土師器、瓦器、土錘等の遺物の出土が認められました。遺跡の詳細な具体相を明らかにするには至りませんでした。縄文時代の年代決定及び古環境復原に重要な位置を占めるアカホヤ火山灰層（約6400前）の堆積を看取すると共に、今後の詳細な調査の積重ねにより、条里に附する集落あるいは「塩」生産地、また古くさかのぼっては縄文時代の様子を窺い知るに至る貴重な資料を得ることが出来ました。

本報告書が、羽倉崎遺跡のみならず、地域の古代史解明の端緒として大いに利用されることを願って止みません。

最後に、調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました田尻町空港対策センターをはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています。近畿府県教育委員会、並びに大阪府下市町委員会に対し深謝申し上げます。

平成元年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

## 例 言

1. 本書は都市計画道路羽倉崎・嘉祥寺線建設に伴う、大阪府泉南郡田尻町嘉祥寺所在、羽倉崎（はぐらざき）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は田尻町の委託を受けて、大阪府教育委員会の指導のもと財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第2班（班長 今村道雄）が担当し、技師 石田成年が現地調査にあたった。本書の作成も石田が行った。
4. 調査は1988年7月8日から同年7月30日まで試掘調査を実施し、その結果を受けて、1989年1月11日から同年3月25日まで発掘調査を実施した。
5. 調査に際し、大阪府教育委員会、田尻町空港対策センターの協力を得た。また、株式会社サザンウイングをはじめとする地元関係各位には格別のご配慮を賜った。
6. 調査および報告書作成に際し、泉佐野市教育委員会 鈴木陽一氏、大阪市立大学理学部地学教室 三田村宗樹氏、当協会各氏から助言、指導を得た。
7. 本調査では、花粉・珪藻分析を川崎地質株式会社に委託、実施した。分析結果概報を付章として本書に収録した。
8. 本書図中の方位は国土座標第VI系の座標北を使用し、標高はT.P.で表示した。
9. 本書で用いた色調の表現は「新版標準土色帖」6版（1986）による。
10. 調査に際し、写真、実測図を記録として残すと共にカラーズライドを作成した。また出土遺物は写真、実測図と共に当協会調査課資料班にて保管している。

## 本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第2章 遺跡の環境	4
第3章 調査成果	6
第1節 層序	6
第2節 遺物	17
第4章 まとめ	20
付 章 1. 羽倉崎遺跡における花粉分析 (概報)	21
2. 清水千尋氏所蔵遺物	25

## 挿 図 目 次

第1図 地区割模式図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査対象地周辺遺跡分布図	5
第4図 I区土層断面図(1)	7
第5図 I区土層断面図(2)	8
第6図 II区土層断面図(1)	9~10
第7図 II区土層断面図(2)	11
第8図 III区土層断面図(1)	12
第9図 III区土層断面図(2)	13
第10図 層序模式柱状図	15~16
第11図 出土遺物実測図(1)	18
第12図 出土遺物実測図(2)	19
第13図 花粉分析フロー	23
第14図 花粉ダイヤグラム	24
第15図 採集地位置図	25
第16図 所蔵遺物実測図	26

## 図版目次

- 巻頭図版 一 (上) II区北壁断面(南から)  
(下) II区北壁断面部分拡大(南から)
- 巻頭図版 二 花粉化石
- 図版 一 (上) 調査対象地全景(西から)  
(下) 調査対象地から西への景観
- 図版 二 (上) I区包含層上面(東から)  
(下) I区東壁断面(西から)
- 図版 三 (上) I区南壁断面(北から)  
(下) I区完掘(北から)
- 図版 四 (上) II区北壁断面(南から)  
(下) II区北壁断面部分拡大(南から)
- 図版 五 (上) II区西壁断面南半(東から)  
(下) II区完掘(北から)
- 図版 六 (上) III区包含層上面(東から)  
(下) III区東壁断面(西から)
- 図版 七 (上) III区南壁断面(北から)  
(下) III区完掘(北から)
- 図版 八 (上) I区包含層出土遺物  
(下) II区包含層出土遺物
- 図版 九 (上) III区包含層出土遺物  
(下) 土錘
- 図版 十 (上) II区北壁サンプリング作業風景  
(下) 清水千尋氏所蔵遺物



# 第1章 調査に至る経過

## 第1節 調査に至る経過

当該調査は、都市計画道路羽倉崎・嘉祥寺線建設に伴う羽倉崎遺跡の発掘調査である。都市計画道路は、泉佐野市と泉南郡田尻町との境界付近で主要地方道泉佐野・岩出線（旧国道26号線）から西北方向に分岐し、りんくうタウンへと至り、都市計画道路泉佐野・田尻・泉南線と接続する、総延長700m、幅員14mのものである。そのうち田尻町域にあたる部分、つまり分岐点から府道鳥取・吉見・泉佐野線（通称浜街道）に至るまでの150mの区間が調査対象地である。対象地は紡績工場内にあり、現状は東半がグラウンド、西半が工場である。

羽倉崎遺跡は、古墳時代の製塩土器の散布地として古くから周知されている。隣接する泉佐野市域においては、調査件数の増加に伴い徐々にではあるが実態が解明されつつある。立地についても、背後に埋積谷や後背湿地を伴う沖積段丘面上に位置するものと理解されている。しかしながら田尻町域における遺跡の実態は不明である。

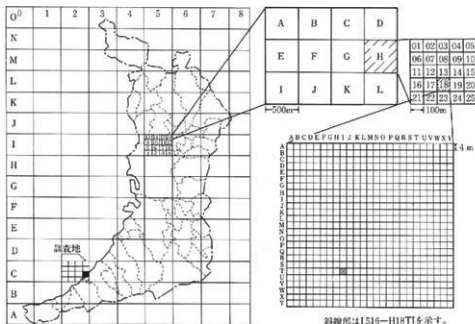
当該調査に先立ち試掘調査を1988年7月8日に着手、同年7月30日に終了した。調査は対象地内に7～10㎡の調査区を6カ所設定し実施した。各調査区において現地表下約250cmまで掘削した結果、それぞれ同一の層と見られる褐色系粘質土層（遺物包含層）および灰色系粘質土（礫混じり）層を検出した。これらの層は対象地一帯により広範囲に広がる可能性が高いものと判断された。対象地東端に設定した調査5区と西端の1区でこの両層をみた場合、対象地内においては褐色系粘質土層は60cm、灰色系粘質土層は85cmの比高差をもって海側に低い傾向が看取された。遺構として1区において現地表下約120cmで、近現代に属すると思われる方形土壇状遺構を検出した。他に遺構は認められなかった。遺物として褐色系粘質土層に至るまでの各層から土師器、瓦器、陶磁器、土製品の出土があったが、少量、細片であった。褐色系粘質土層から出土したものの所産については14・15世紀代とみられた。灰色系粘質土層からの出土は認められなかった。

田尻町域における当該遺跡の初の調査であり、遺跡内容の一端を窺い知ることはできたものの、試掘という限られた条件の下での調査であったことから、詳細な具体相の追及には至らなかった。

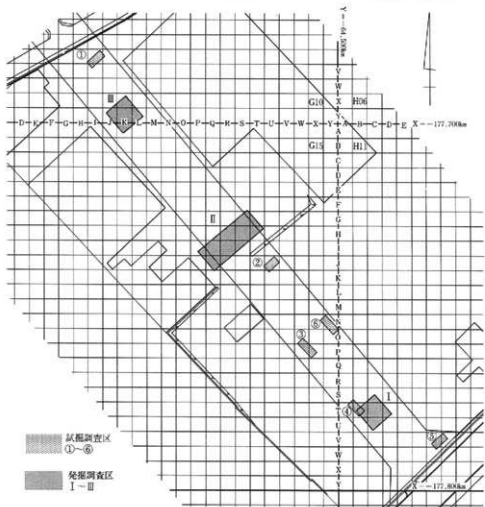
## 第2節 調査の方法

調査区は、延長150m、幅14mの対象地に3カ所設定した。東から順にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼称する。Ⅰ区、Ⅲ区が7m四方、Ⅱ区が縦17.5m、横7mの規模である。各区とも鋼矢板を打設し、現地表下約1mまでを機械掘削、以下を人力掘削とした。

当協会では、調査区の地区割り方法を以下のように規定している。国土調査法に基く新平面直角座標の第Ⅵ座標系を使用して遺跡の位置を表示し、大阪府に設定する4m四方の区画を遺物取り上げの最小単位とする。地区割りの基本は大阪府発行新版1/2500（都市計画図）である。この地図を12等分して500m四方の区画を作る。この区画にAからLまでの記号を付ける。次にこの区画を25等分して100m四方の区画を作る。この区画は01から25までの2桁の数字で示す。次にこの区画を625等分して4m四方の区画を作る。この区画は2文字のアルファベットで示す。縦方向に25行、横方向に25列あり、表示の際は縦方向を優先する。例えば、第1図に斜線で示した区画は地図の名称が大Ⅰ-5-16、500mの区画がH、100mの区画が18、4mの区画がT1となり、正式には「大Ⅰ-5-16-H18T1」と表現する。一般的には前半の地図の名称を略し、「H18T1」と表現する。



第1図 地区割り模式図



第2図 調査区位置図

## 第2章 遺跡の環境

羽倉崎遺跡が所在する大阪府泉南郡田尻町は大阪府の南部に位置し、北は泉佐野市、南は泉南市に接する。西北は大阪湾に面し、遠く淡路島や四国までも望むことができる。

泉佐野市も含めた当該地周辺の地理的立地を概観すると、基盤山地より丘陵および洪積段丘高位面が派生し、その縁辺部に洪積段丘中位面や低位段丘が形成され、見出川、佐野川、田尻川、榎井川がこれらの地形を分断するように流れる。各河川の下流域には沖積段丘や氾濫原が発達する。田尻町の地形環境は、榎井川の氾濫原、沖積低地、榎井川の右岸に沿う沖積段丘に分類される。主要な遺跡は、各河川の洪積段丘や沖積段丘上に位置し、旧石器から近世に至る各時代の遺跡群が周知されている。

旧石器時代から縄文時代中期にかけて、遺跡として認められる明確な資料は乏しく、泉南郡阪南町所在の玉田山遺跡、蓮池遺跡、泉南市所在の海宮宮池遺跡などで採集された有舌尖頭器、木葉形尖頭器が資料として知られるに留まる。縄文後期から晩期にかけての遺跡として、三軒屋遺跡があり、遺構、遺物が数多く検出された。三軒屋遺跡はその後、男里川左岸の男里遺跡と共に弥生中期にかけて展開する。両遺跡は各水系の最も生産を掌握しやすい地点に位置しており、諸活動の中核としての役割りを担った拠点集落と想定される。榎井西遺跡では方形周溝墓が検出された。当該地周辺における古墳の分布は非常に乏しい。特に前・中期古墳の存在はなく、兎田、新家といった数基単位の小円墳で構成する後期古墳群を散見するのみである。集落の立地はほぼ弥生時代集落と同じくし、遺物の散布は各所で認められる。湊遺跡や当該遺跡では製塩土器の出土がある。禅興寺、海会寺は白鳳寺院としてよく知られる。長滝周辺には整然とした条里遺構が存在する。平安時代中期の掘立柱建物等が佐野川流域に所在する湊遺跡で多数検出されている。平安時代後期から鎌倉時代にかけてはいくつかの荘園が成立、開発の進展が見られる。泉南市所在信達荘が12世紀初頭には榎井川左岸一帯に、泉南郡田尻町吉見周辺には吉見荘が12世紀末葉に、また泉佐野市所在日根荘、長滝荘が13世紀前半には、それぞれ成立した。

<参考・引用>大阪府教育委員会	『田尻遺跡・船岡山遺跡発掘調査概要』	1988
泉佐野市教育委員会	『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 I～Ⅷ』	1981～1988
泉南市教育委員会	『海会寺』	1987
(財)大阪府埋蔵文化財協会	『内井池遺跡試掘調査報告書』	1985



第3図 調査対象地周辺道跡分布図

## 第3章 調査成果

### 第1節 層序

前述したように調査区は3カ所設定した。何れの調査区においても遺構は認められなかった。以下、各調査区ごとに層序を記す。尚、方位の呼称については、便宜上、旧国道26号線側を東、海側を西とする。

#### ・I区

I区は調査対象地西端に設定した。南西角は試掘調査区4区と重複する。現地表下340cmまで掘削した。

第1層は工場建設時の造成による盛土及び擾乱である。第2層、第3層は近現代の堆積とみられる。

第4層～第7層は黒褐色系粘質土層である。厚さ約30cm。色調及び基質の微妙な相違、遺物包含の有無、湿润植物遺体の多少等により4層に細分される。第4層～第6層は黒褐色（5YR2/1～7.5YR3/1）粘質土で、上層は砂を若干含む。各層とも植物遺体を含む。遺物の出土は第6層までに限られ、第7層以下からは認められなかった。

第8層は褐色（10YR4/1）砂質土に第7層が混じる。第10層、明緑灰色（10G7/1）粘質土上面は凹凸が著しい。第8層との間に第9層、灰色（5Y5/1）砂質土を挟在する。

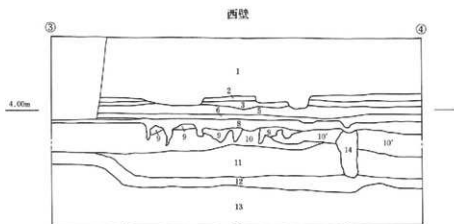
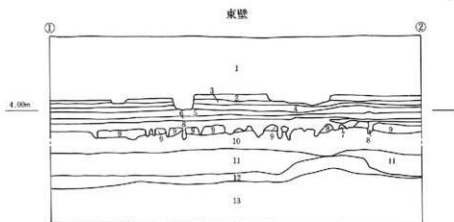
第11層以下は径3～20cm大の砂礫層で、色調により細分される。

#### ・II区

II区は調査対象地のほぼ中央に設定した。道路により南北に分断される工場をつなぐ地下道の設置位置である。現地表下440cmまで掘削した。

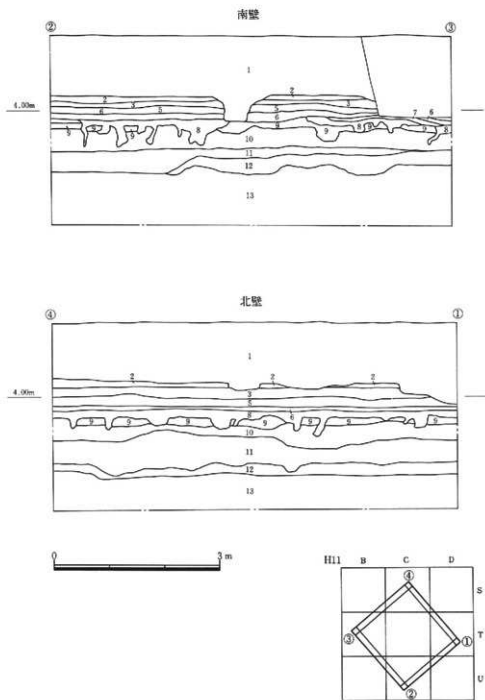
第1層は盛土及び擾乱。第2層～第5層は近現代の堆積とみられる。

第6層～第11層は黒褐色系粘質土層である。厚さ60～90cm。色調及び基質の微妙な相違、遺物包含の有無、湿润植物遺体の多少等により6層に細分される。第6層～第8層は黒褐色（7.5YR2/2）粘質土で、第6層は砂を若干含む。第6層の上面には第4層、灰色（N6/0）砂を堆積土とする径、深さとも10～20cmの足跡とみられる窪みが多くあった。一部慎重に精査したが明瞭に形をなすものはなかった。中世遺物の出土は第6層、第7層に限られる。各層とも植物遺体を含み、第8層が特に多い。第9層は褐色（7.5YR4/3）粘質



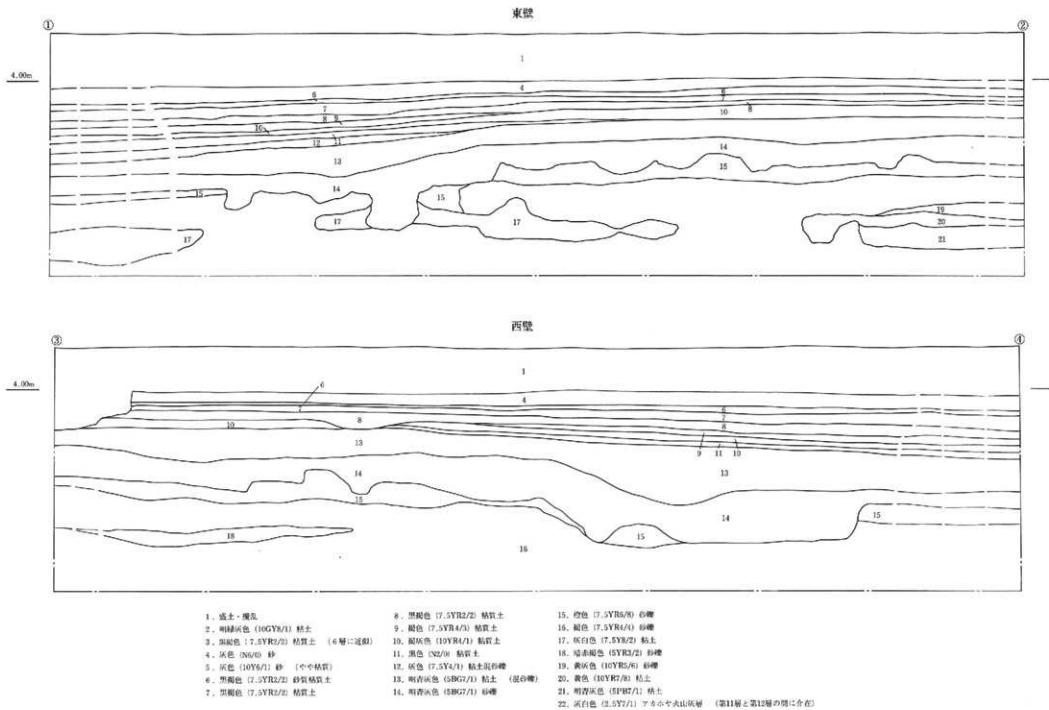
- |                         |                                   |
|-------------------------|-----------------------------------|
| 1. 盛土・埋戻                | 8. 褐色 (10YR4/1) 砂質土 (+第7層混入)      |
| 2. オリーブ褐色 (7.5Y2/2) 砂質土 | 9. 灰色 (5Y5/1) 砂質土                 |
| 3. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土    | 10. 暗緑灰色 (10G7/1) 粘質土             |
| 4. 黒褐色 (7.5YR3/1) 砂質土   | 10'. 第9層+第10層                     |
| 5. 黒褐色 (5YR2/1) 砂質粘質土   | 11. 青灰色 (5PB6/1) 砂礫 (径3~20cm)     |
| 6. 黒褐色 (5YR2/1) 粘質土     | 12. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂礫 (径3~20cm)   |
| 7. 黒色 (N1.5/0) 粘土       | 13. 1.2%赤褐色 (5YR4/4) 砂礫 (径3~20cm) |
|                         | 14. 明黄褐色 (10YR7/6) 砂礫 (粘土混)       |

第4図 1区土層断面図(1)

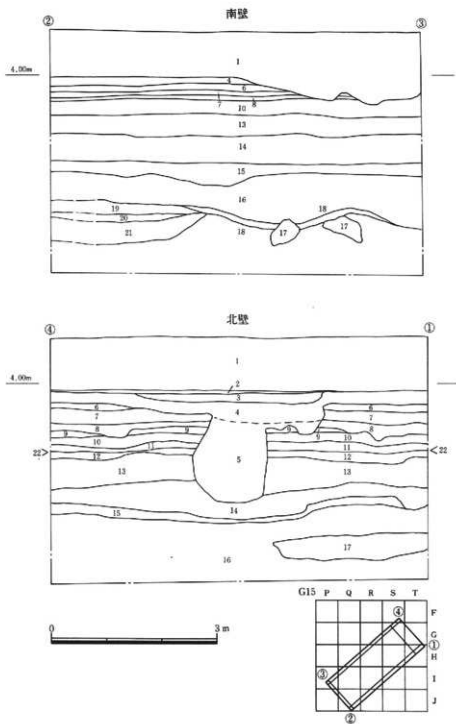


第5图 I区土层断面图(2)

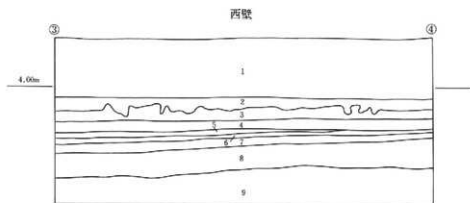
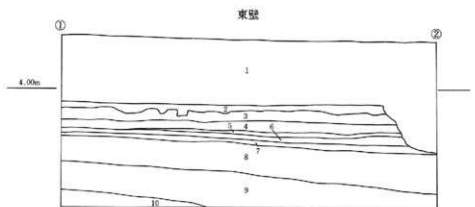




第6図 II区土層断面図(1)

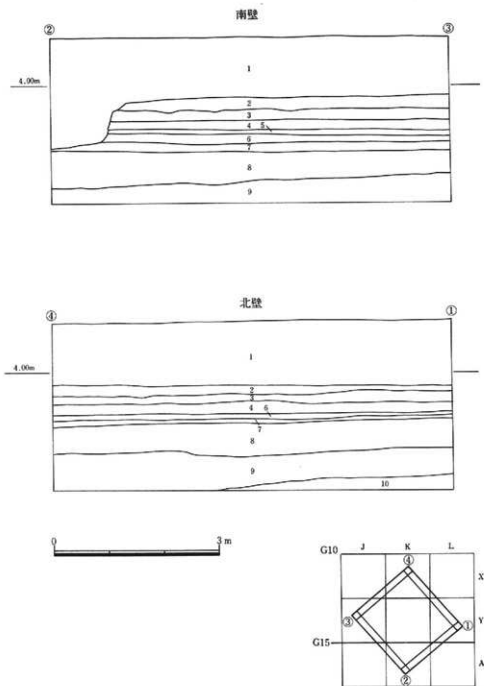


第7图 II区土层断面图(2)



- |                       |                               |
|-----------------------|-------------------------------|
| 1. 熟土·擾乱              | 6. 褐黄色 (10YR4/1) 粘质土          |
| 2. 灰色 (7.5Y4/1) 砂     | 7. 黑色 (N2/1) 粘质土              |
| 3. 黑褐色 (5YR2/1) 砂质粘质土 | 8. 灰白色 (5N7/0) 砂壤 (褐色粘土多量に含七) |
| 4. 黑色 (7.5YR2/1) 粘质土  | 9. 灰白色 (5N7/0) 砂壤             |
| 5. 褐色 (7.5 YR4/3) 粘质土 | 10. 黄褐色 (10YR7/8) 砂壤          |

第 8 图 Ⅲ区土层断面图 (1)



第9图 III区土层断面图(2)

土。植物遺体を含む第6層～第13層の中での最も多くそれを含有する。第10層は褐灰色（10Y R4/1）粘質土、第11層は黒色（N2/0）粘質土である。

第11層と第12層の間に薄く挟在する第22層はアカホヤ火山灰層である。灰白色（10Y R 8/1）を呈する。厚さは最大で2.5cmである。

第12層から下層は上層とは色調、基質において様相が全く異なる。第12層は灰色（7.5 Y4/1）粘質土と砂礫の混合層である。礫は拳大以下の和泉砂岩クサリ礫が多い。第13層は調査区北半において約40cmの比高差をもって北に傾斜する。第14層以下は砂礫層。色調、礫の大小により細分される。第17層、第20層、第21層といった粘土層を挟む。

当区北壁第6層以下について花粉・珪藻分析用土壌サンプルを採取した。そのうち第10層～第13層及び火山灰層の分析結果概報を付章として収録した。

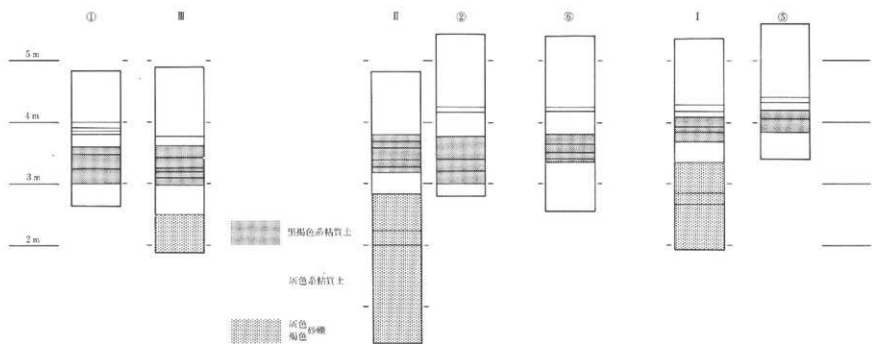
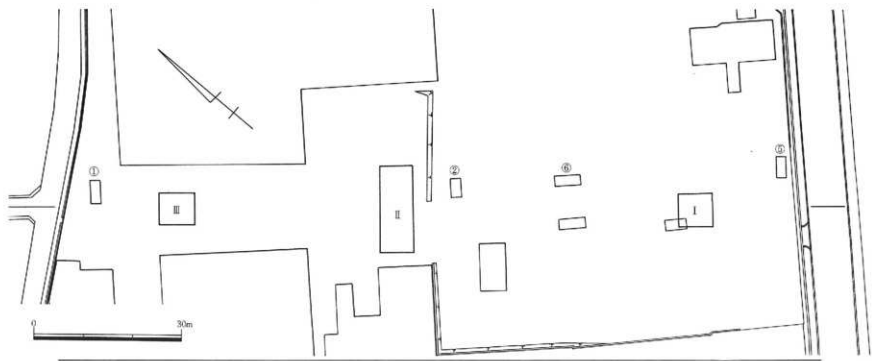
#### ・ III区

III区は調査対象地西端に設定した。現地表下300cmまで掘削した。

第1層は盛土及び攪乱である。第2層、灰色（7.5 Y4/1）砂は近現代の堆積とみられる。

第3層～第7層は黒褐色系粘質土層である。厚さ50～80cm。色調及び基質の微妙な相違、遺物包含の有無、湿潤植物遺体の多少等により5層に細分される。第3層は黒褐色（5 Y R2/1）砂質粘質土。II区同様、同層上面に第2層を堆積土とする不定形の窪みが多く見られた。第4層～第7層は植物遺体を含み、第5層、第6層で多い。遺物の出土は第3層～第5層に限られ、第6層以下からは認められなかった。

第8層以下は砂礫層で、色調、基質により細分される。第8層、灰白色（N7/0）は同色粘質土を多く介在する。同層上面で約40cmの比高差で南に低い。第9層以下では粘質土の介在は認められない。



第10图 层序模式柱状图

## 第2節 遺物

出土遺物は、瓦器、土師器、陶磁器、土製品である。総じて時期的に中世を遡るものは認められなかった。1・6・30・32・34はI区、7・19・33はII区、20・29・35はIII区からの出土である。ここでは褐色系粘質土層から出土したもののみ図示した。

1・3・7・13・20・25は瓦器碗である。口径（復元）10.9～15.8cm、器高2.0～3.3cm、高台径（復元）2.6～5.7cmを測る。見込みの暗文は螺旋状を呈するものが多く、10のみ格子状を呈する。高台の断面形態には三角形、半円形、紐状の3種類が認められる。

9の瓦器碗は復元口径12.0cmを測る。内外面ともヘラミガキを施すが外面は若干粗い。口縁端部内面に幅1mm弱の浅い凹線がめぐる。口縁部のみ僅かに残る細片であるため、見込み部分の暗文はわからない。胎土は精良かつ緻密で、焼成は良好、堅緻である。色調は内外面とも暗灰色（N3/0）を、断面は灰白色（10Y8/1）を呈する。本資料は所謂「大和型」の瓦器碗と判断される。

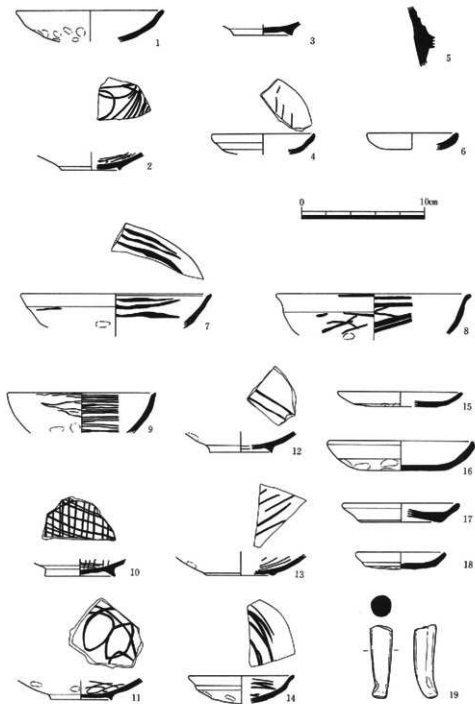
4・14・15・26は瓦器皿である。口径（復元）7.0～10.0cm、器高（現存）1.2～2.2cmを測る。胎土は総じて精良で、砂粒を少量含むものもある。焼成は良好、堅緻である。

5は瓦質羽釜である。口縁部はやや内傾し、外面に3条の凹線をめぐらせる。内面にナデ調整を施す。胎土には砂粒が多く、焼成もやや軟質である。

19は瓦器足釜の足先端部である。現存長6.0cm、直径1.0～1.8cmを測る。形状は先端に向けて細くなり、端部は屈曲する。土馬の足に近似するが、よりしっかり踏ん張る感が強い。色調は灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。胎土はやや粗く石英、長石を含む。

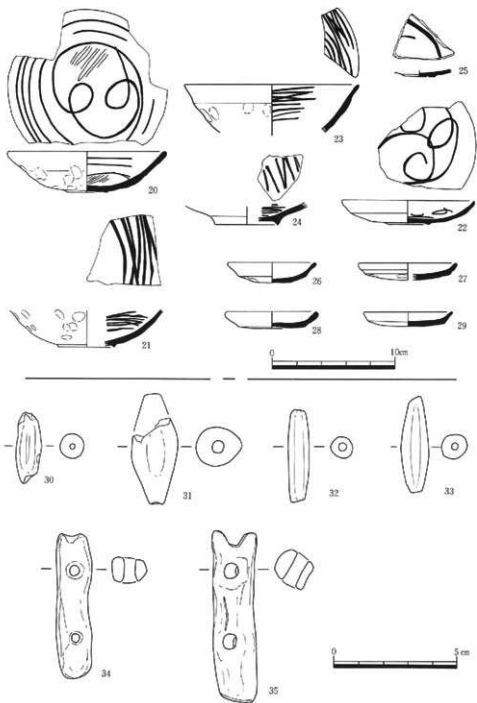
16は土師器皿、6・17・18・27・29は土師器小皿である。小皿は口径7.1～9.6cm、器高1.3～1.5cmを測る。色調は灰白色（2.5Y8/2）を中心とする。

30～35は土鍾である。いずれも土師質である。色調は灰赤色（10R5/2）～灰白色（2.5Y8/1）を呈する。30～33は軟質の管状土鍾である。長さ3.0～5.0cm、直径0.8～1.9cm、孔径0.2～0.5cm、重量1.73～6.07gを測る。それぞれの形状に差が認められ、特に31は胴部が大きく張るラクビーボール形を呈する。34・35は一方の小口に溝をつけた有孔片溝土鍾でやや軟質である。長さ5.8・6.9cm、直径1.3～1.5・1.4～1.8cm、孔径3.5～4.5・6.0mm、重量12.76・20.93gを測る。両者とも両端に近い位置に穿孔する。



第11圖 出土遺物実測図(1)





第12圖 出土遺物実測図(2)

## 第4章 まとめ

発掘調査とはいえ狭小な調査面積であったことから遺跡の詳細な具体相を明らかにするには至らなかったが、事実関係を明示しまとめとする。

各調査区において、試掘調査時と同じくそれぞれ同一の黒褐色系粘質土層（遺物包含層）および灰色系粘質土（礫混じり）層を検出した。対象地内での比高差は褐色系粘質土層は60cm、灰色系粘質土層は85cmで、著しい凹凸もなくなだらかに海側に低い。遺構は何れの調査区においても認められなかった。遺物は主として黒褐色系粘質土層から土師器、瓦器、土製品の出土があった。所産については13～15世紀代を中心とする。灰色系粘質土層以下からの出土は認められなかった。

Ⅱ区北壁においてT.P.+2.75mに最大厚2.5cmのアカホヤ火山灰（約6400年前）のはば水平な堆積が看取された。純粋層と判断される。各地での調査例ではアカホヤ火山灰層を挟在する上下層から縄文遺物が出土することがある。よって縄文遺物の年代決定に重要な位置を占める層ではあるが、当該調査ではそれを指標として年代を決する必要がある遺物の出土は全く認められなかった。しかし逆にいえば、火山灰層及び上下層に伴う遺物の出土が認められなかったことに当該地の地理的特性を見出すことができようか。今後の検討課題としたい。何れにせよ付章に著されているように、花粉分析とともに当該地の古環境復元にあたり重要不可欠な資料となりうる。

当該地の立地については、後背湿地あるいは小河川の蛇行により形成された沖積低地上と判断される。また大日本帝国陸地測量部による1885年発行の地形図には対象地を横断する小河川の表示があり、対象地の最も近くを通るT.P.+5mのコンターラインが河川に沿って上流方向に入り、谷状を描くことから、埋積谷の存在も考えられる。

泉佐野市を流れる樺井川の右岸には良好な条里遺構が広がり、当該地近くの泉南郡田尻町嘉祥寺にまで及ぶ。今回の調査では明確な遺構の検出はなかったが、将来的に関西新空港、りんくうタウン建設に伴う開発が急ピッチで進むものと思われ、調査件数に比例した新たな資料の増加が見込まれる。詳細な調査の実施より、条里に附する集落あるいは生産地の具体相を明らかにできよう。

# 付章 1. 羽倉崎遺跡における花粉分析（概報）

川崎地質株式会社

## 1 試料及び処理方法について

### 1) 試料

分析試料は、第7図に示すII区北壁で採取した。今回は火山灰層準の上下で採取した6試料について花粉分析を行った結果を報告する。

### 2) 花粉処理方法

分析処理の手順は第13図に示す花粉分析フローのとおりである。5ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

作成したプレパラートを顕微鏡下で400-1000倍の倍率で観察し、木本花粉で150-200個以上の検定、計数を行い、同時に出現した草木花粉の検定、計数も行った。

## 2 分析結果

### 1) 花粉分析結果（第14図）

花粉ダイアグラムは計数した木本花粉を基数にし、百分率で表した。

試料No.1, 2では、アカガシ亜属が40%程度の出現率を示し、コナラ亜属も20%程度で安定して出現する。草木花粉では小型のイネ科が60-70%程度の高い出現率を示す。試料No.3-6では、アカガシ亜属、コナラ亜属共に20-30%程度の出現率を示す。草木花粉では小型のイネ科が40-60%程度、カヤツリグサ科/10-20%程度の出現率を示す。試料全体を通してニヨウマツ亜属、モミ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属、イヌシデ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属が数-15%程度で安定して出現する。

## 3 考察

### 1) 花粉分帯

花粉分析結果をもとに花粉分帯を行った。

#### ・I帯（試料No.1, 2）

アカガシ亜属が40%程度の出現率を示し、コナラ亜属も20%程度で安定して出現する。ニヨウマツ亜属、モミ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属、イヌシデ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属が数%程度で安定して出現する。

#### ・II帯（試料No.3～6）

アカガシ亜属、コナラ亜属共に20～30%程度の出現率を示す。ニヨウマツ亜属、モミ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属、イヌシデ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属が数～15%程度で安定して出現する。

#### 2) 植生変遷及び堆積環境変遷

ここでは、II帯より時間をさかのぼりI帯に至る遺跡周辺の植生復元、および、試料採集地周辺の堆積環境推定をおこなう。

##### ・II帯期

試料採集地周辺はイネ科植物の生い茂る低湿地であり、ニレ科を中心とする河畔林の存在も考えられる。また粗粒堆積物からなることより、この時期には水の流れ込みがあったと考えられる。遺跡周辺の低地にはアカガシ亜属を中心とする照葉樹林が広がり、丘陵部から山地部にかけてはモミ属、ツガ属を中心とする中間湿帯林やコナラ亜属、ブナ属を中心とする冷温帯林の存在が考えられる。ニヨウマツ亜属の出現が少ないこと、大型のイネ科がほとんど出現しないことや、栽培種と考えられる花粉も出現していないことから、遺跡周辺部で人為的な植生の破壊が行われていた可能性は少ない。

##### ・I帯期

試料採集地点周辺はイネ科植物の生い茂る低湿地であり、泥炭層が発達し、粗粒堆積物が観られないことから、水の流れはほとんど無かったと考えられる。遺跡周辺では照葉樹林の分布域が広がり、中間湿帯林や冷温帯林の分布域は山地上部へと縮小していったと考えられる。II帯と同様にニヨウマツ亜属の出現が少ないこと、大型のイネ科がほとんど出現しないことや、栽培種と考えられる花粉も出現していないことから、遺跡周辺部で人為的な植生の破壊が行われていた可能性は少ない。

#### 3) 堆積年代の推定

今回試料を採集した土層は無遺物層であるため、I・II帯の堆積年代は考古学上は明らかにされなかった。今回の試料の分析結果と、大阪周辺での既存のデータ（古谷，1979）とを比較した場合、アカガシ亜属とコナラ亜属の出現する割合の変化から、II帯がF3帯上部に、I帯がF4帯下部に相当すると考えられる。近畿地方各地での花粉分析結果との対比より、F3帯はおよそ7500～6000年前、F4帯はおよそ6000～2500年前の期間と考えられている（古谷，1979）。これらのことから今回のI帯とII帯の堆積年代は、ほぼ6000年前を中心とした7500～2500年前の間の一時期であると考えられる。

#### 4) 火山灰層について

第11層、第12層中に挟在する火山灰層は、花粉帯ではII帯に対応する。花粉組成よりI帯とII帯との境界はおおよそ6000年前頃と考えられること、現在近畿地方で報告されている広域火山灰のうち、横大路（アカホヤ）火山灰がおおよそ6400年前に降灰したとされている（前田，1980）ことなどから、この火山灰層は横大路（アカホヤ）火山灰層に対比される可能性が強いと考えられる。

## 4 まとめ

羽倉崎遺跡において行った今回の分析から以下の事が明らかになった。

- 1) 花粉分析から遺跡内での花粉化石群衆はI、II帯の2花粉帯に分かれる。
- 2) 古谷（1979）の花粉帯との比較より、I帯はF4帯（おおよそ6000～2500年前）、II帯はF3帯（おおよそ7500～6000年前）に相当すると考えられる。
- 3) 遺跡周辺での、おおよそ6000年代を中心とした一時期の植生変遷と、遺跡内での堆積環境の変化が明らかになった。
- 4) 発見された火山灰層は、花粉分帯より横大路（アカホヤ）火山灰の可能性が強い。

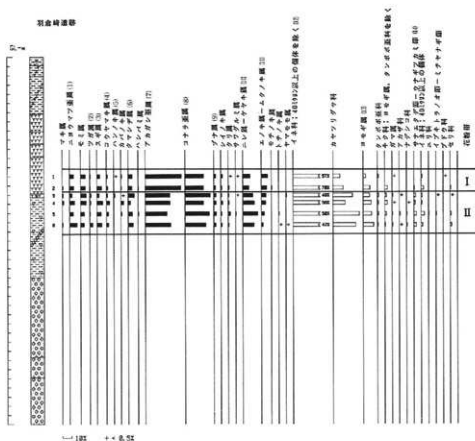
## 5 引用文献

古谷正和（1979）大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生史，第四紀研究，vol. 18, No. 3, p. 121-141

前田保夫（1980）縄文の海と森，238p，蒼樹書房。



第13図 花粉分析フロー



巻頭図版 二 花粉化石顕微鏡写真説明

No.	学名	和名	No.	学名	和名
1	Diplixylon	ニヨウマツ亜属	8	Quercus	コナラ亜属
2	Tsuga	ツガ属	9	Fagus	ブナ亜属
3	Cryptomeria	スギ属	10	Ulmus-Zelkova	ニレ属-ケヤキ属
4	Sciadopitys	コウヤマキ属	11	Celtis-Aphananthe	エノキ属-ムクノキ属
5	Alnus	ハンノキ属	12	GRAMINEAE	イネ科; 40 $\mu$ 未満
6	Carpinus	クマシデ属	13	Artemisia	ヨモギ属
7	Cyclobalanopsis	アカガシ属	14	Persicaria-Echinocaulon	サナエタデ属-ウナギツカミ属

## 付章 2. 清水千尋氏所蔵遺物

本資料は高石市在住の清水千尋氏により和泉市黒石町で採集された須恵器片6点である。

採集地は和田川と横尾川に挟まれた光明池丘陵の西縁辺、丘陵の最高所から横尾川方向へ派生する尾根の南向き斜面である。尾根の先端は横尾川中流域右岸の河岸段丘中位面にひらけた黒石集落までのびる。清水氏によると標高120～150mの地点で採集したとのことである。採集地一帯は陶器古窯址群大野池・光明池地区の南限にあたり、採集地近くに須恵器窯が数基確認されている<sup>1)</sup>。

資料の内訳は蓋が4点、坏Bが1点、甕とみられる破片が1点である。うち5点を図示した。焼成は堅緻である。8世紀代の所産とみられる。6点何れも歪みが著しいことから、焼成後、窯出しの際に廃棄されたものであろう。

これらの資料により、この一帯により多くの未確認窯の存在が想起される。

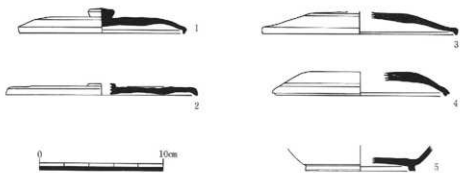
末筆ながら、資料公開に際しご快諾いただいた清水氏に感謝致します。

註 1) 大阪府教育委員会文化財保護課 『大阪府文化財分布図』 1986

和泉考古学研究会 『和泉黒石1号墳石室実測調査報告書』 1983



第15図 採集地位置図 (1/50000)





版 圖



調査対象地全景（西から）



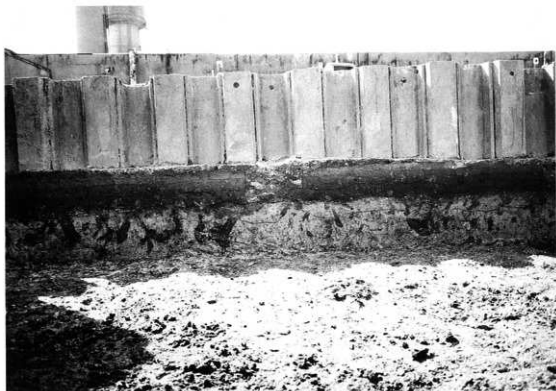
調査対象地から西への景観



Ⅰ区包含層上面（東から）



Ⅰ区東壁断面（西から）



Ⅰ区南壁断面（北から）



Ⅰ区発掘（北から）



Ⅱ区北壁断面（南から）



Ⅱ区北壁断面部分拡大（南から）



Ⅱ区西壁断面南半（東から）



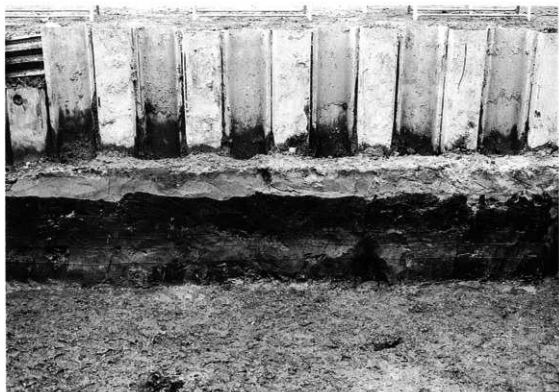
Ⅱ区完掘（北から）



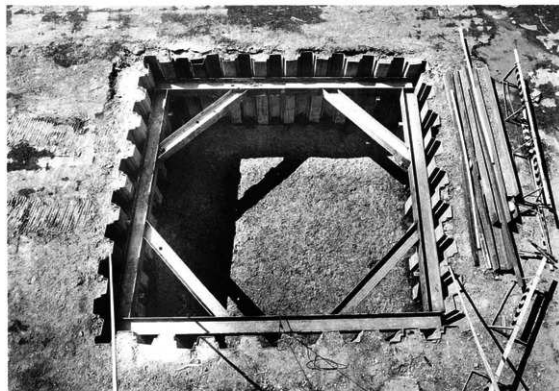
Ⅲ区包含層上面（東から）



Ⅲ区東壁断面（西から）

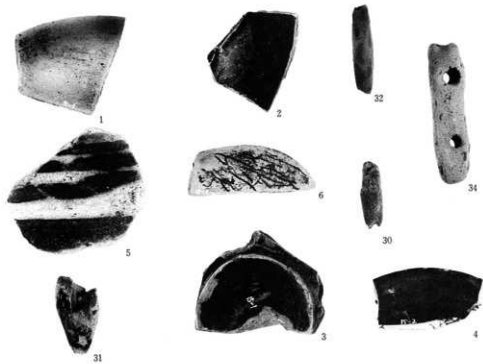


Ⅲ区南壁断面（北から）

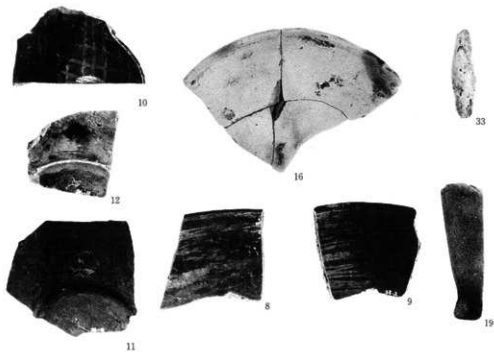


Ⅲ区完船（北から）





I区包含层出土文物



II区包含层出土文物



Ⅲ区包含层出土遗物





Ⅱ区北壁サンプリング作業風景



清水千尋氏所蔵遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第38輯  
都市計画道路羽倉崎・高祥寺線建設に伴う

## 羽 倉 崎 遺 跡

—発掘調査報告書—

1989年3月31日発行

編集・発行

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市中央区谷町2丁目2-20番地大手前7号1115号

印 刷

株式会社 中島弘文堂印刷所